

バードリサーチ ニュース

2010年10月号 Vol.7 No.10



Butastur indicus
Photo by Nonaka Jun

参加型調査

外来鳥ウォッチへのご協力 ありがとうございました！

植田 睦之

今年から、はじめた外来鳥ウォッチですが、多くの情報をいただきました。ありがとうございました。特に情報の多かったコジュケイ、ガビチョウ、ソウシチョウについて、野鳥記録データベース「フィールドノート」のデータとあわせて分布図を描きました。以下にその概要をお知らせします。

コジュケイ

中部地方や瀬戸内海沿岸、南九州など、情報が抜けてしまっている地域もありますが、太平洋側に広く分布する様子が示されました。積雪の少ない太平洋側に分布する特性から考えると、今後、日本海側の積雪の減少とともに分布を拡大する可能性が考えられますが、反面、狩猟目的の放鳥がなくなったためか、近年、分布や個体数が減少している地域があることも指摘されており、今後、分布が縮小していく可能性も考えられます。継続して、調査を続けていくことで、分布がそのどちらに向かうのか、明らかにしたいと思います。



図1. コジュケイの分布。



写真1. コジュケイ。

ガビチョウ

関東および北九州、そして南東北に分布していました。これは環境省の全国鳥類繁殖分布調査(2004)や森林総研の川上さんたち研究結果(Kawakami & Yamaguchi 2004)と同様です。しかし特に関東では、それらの報告時点よりも分布範囲が広がっているように見えます。

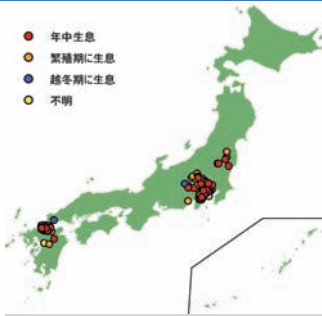


図2. ガビチョウの分布。

東京で見ていると、以前は丘陵部の林にいる鳥という印象だったのが、平地の小さな木立でも見られるようになるなど、生息環境の幅が広がっているように感じます。すでに生息している場所の中での生息環境の変化、また新しい場所に分布を拡げた場合の利用環境などを見ていくことで、今後のガビチョウの分布変化の予測ができるようになるかもしれません。

ソウシチョウ

九州に多く、その他にも北関東以南に点々と分布していました。環境省の分布調査では、奈良から三重にかけての地域に広く分布していましたが、今回の結果では、その地域に2地点しか報告がなかった点が異なっていました。逆に、環境省では報告されていない広島、鳥取県、愛知県などでも記録され、2000年代に分布が広がっている様子が伺えます。



写真2. ソウシチョウ。

また、越冬地での記録数を見ると、2004/05の冬期や、2006/07、2009/10の冬期には多く記録されたのに対し、その他の年はあまり記録されませんでした。分布の変化と共に、季節的な移動の年変動をもたらす原因についても、今後のモニタリングで明らかにしていきたいと思えます。



図3. ソウシチョウの分布。

これらの鳥以外にも、コブハクチョウ、インドクジャクについて情報収集を行なっています。この2種については、ホームページに結果を示していますのでご覧ください。外来鳥は年々分布を変化させていますので、今後も継続して調査を続けていきたいと思えます。引き続きの調査へのご協力、よろしくお願ひいたします。

引用文献

Kawakami, K & Yamaguchi, Y. 2004. The spread of the introduced Melodious Laughing Thrush *Garrulax canorus* in Japan. *Ornithological Science* 3: 13-21.

活動報告

**池島で未確認飛行物体を確認
～ 2010年8月27日に出現した不思議エコー ～
植田陸之・三田長久(熊大)・藤吉康志(北大・低温研)**

レーダーが捉えた！

現在、環境省から研究費をいただき、長崎半島沖合にある長崎市池島で風と波と鳥類の連続観測を続けています。船舶レーダーを使った鳥の観測から、鳥の渡りが多くなる時期や飛行高度、ほかの地域との渡り鳥の飛行パターンの違いなど、いくつかのことが見えてきているのですが、それだけでなく、毎日データをとっている連続観測ならではの珍しい事象も観測することができました。それは8月27日に観測された興味深いエコーです。

そのエコーが現れたのは8月27日10時半頃。池島の数地点から沸きあがるように現れ、地上約250m、高いときは約700mまで達した後水平に広がり、上空の風に乗って海上へと流れていきました(図1)。この不思議エコーは、11時半過ぎに一度消滅しましたが、12時過ぎに再び湧き上がり、13時過ぎには再び見られなくなりました。

このエコー、見た目は雨のエコー(図2)と似ています。しかし雨のエコーは上から近づいてきて画面の広い範囲を覆うのに対して、下から湧いてきた点と、ごく低空しか覆っていなかった点が異なっていました。さらにこのエコーに対して、上空を飛んでいた鳥が突っ込んでいく様子も記録されていました。

■動画(13.3MB)はこちら

<http://www.bird-research.jp/appendix/insect-bird.gif>

この不思議エコーは何なのでしょう？

不思議エコーの動きは、この時の大気の動きを表しているようです。すなわち、地上の数地点から立ち上がるエコーは、猛禽類が上昇するときにも使う上昇気流、サーマル(熱泡)そっくりです。このサーマルは、午前中は島から海に向かってゆっくりと流されており、これは下層に陸風が吹いていたことを示しています。一方、午後は逆方向に流されており、海風の存在を示しています。また、こ

のエコーが上空で水平に広がったということは、サーマルが上空の温度逆転層に達して浮力を失ったためと考えられます。

今回観測された不思議エコーは、このような大気の動きが、大気の屈折率の変化で生じる「エンジェルエコー」(非降水エコー)として映った可能性があります。しかし、それにしてはエコーが強すぎますし、鳥が集まってきていたことから、単なる大気ではなく、鳥の食物となる「何か」が含まれていたのだと考えられます。もうひとつの可能性としては、鳥や虫による「エンジェルエコー」ですが、自分の意思で自由に飛ぶことのできる鳥からのエコーとは明らかに動きが異なっています。したがって、飛行能力の弱い虫がサーマルによって運ばれているのがエコーとして映ったものである可能性が高いと考えています。

楠・松村(1998)や、Kusunoki (2002), Kusunoki *et al.* (2008)は、こうした虫を「大気プランクトン」と呼び、それによる「エンジェルエコー」の水平分布、日周変化を調査し、「エンジェルエコー」が陸上にのみ分布し海岸線ではっきりと切れていたこと、大気境界層以下にのみ存在していたと述べています。これは、今回の不思議エコーの水平および鉛直分布とよく一致します。ただ大きく異なっている点は、今回観測した不思議エコーが、これまで全く観測されていなかったという点です。2009年11月から連続して観測していますが、今回のような特異なエコーが観測されたのは8月27日のみです。問題は、なぜこの日に限って虫が大量発生したかです。アリは、春から秋にかけて1年に一回、結婚飛行しますので、8月27日がちょうどその日にあたっていた可能性があります。

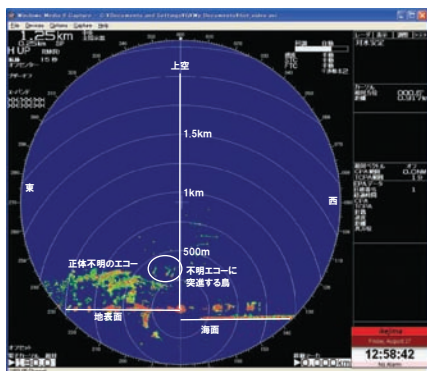


図1. 8月27日に池島で連続観測しているレーダーが捉えた不思議エコー。

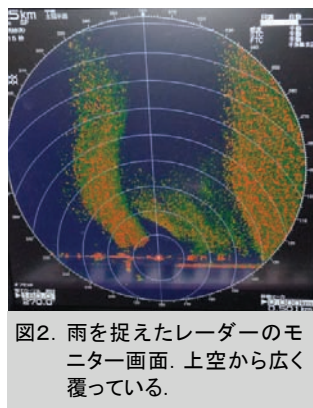


図2. 雨を捉えたレーダーのモニター画面。上空から広く覆っている。

九州の虫の情報をお願いします

関東では梅雨前から梅雨の晴れ間にたくさんの羽アリが飛んでいるのが見られます。そして、ツバメがそのアリたちをたくさん食べているそうです(早川・寺山 1993)。九州では8月末にこういう飛行をするアリあるいはその他の虫がいるのでしょうか？ ご存知の方は情報をお願いします。

情報送付先:

植田陸之 (mj-ueda@bird-research.jp)

引用文献

- 早川雅春・寺山守. 1993. ツバメのフンからみた羽アリの動態. *Strix* 12: 209-213.
- 楠研一・松村雄. 1998. 新たな挑戦-大気プランクトンを気象レーダーでとらえる-, *インセクタリアム*, 35(4), 104-107.
- Kusunoki, K. 2002. A preliminary survey of clear-air echo appearances over the Kanto Plain in Japan from July to December 2005. *J. Atmos. Oceanic Technol.*, 19, 1063-1072.
- Kusunoki, K., T. Chagihira, Y. Motodate, T. Aoshima, H. Kobayashi, F. Taka, F. Mawashi, Y. Hirakawa, H. Kiyota. 2008. A Climatology of Clear-air echoes from the operational C-band Doppler radar in Japan, Reprints, 5th Conference on Radar Meteorology and Hydrology, Helsinki, 30 June-4 July, 2008, P12.2

研究紹介

カワウだって好き嫌い？ 餌選好性の研究紹介

加藤ななえ

私は餡子が苦手なビールが大好きです。自分たちのことを考えると、鳥たちにも好き嫌いがあるのではないかと考えてしまいます。漁協さんからは、カワウはアユばかりを狙うとよく言われますが、実際はどうでしょうか？鳥学会大会の自由集会の発表から、カワウに餌魚種の選好性があるのかどうか調べた二つの研究の一部を紹介したいと思います。

飼育実験から

野外でカワウの採食を観察することはなかなかできません。そこで群馬県水産試験場の田中英樹さん達は、保護されたカワウ5羽を用いて飼育下での実験をおこないました。コンクリート製屋内池(6×8×1.8m)と、カワウの餌となる魚として全長14~15cmのアユ、ヤマメ、コイ、ウグイの4種を準備しました。

カワウ1羽を、同数のアユ、ヤマメ、コイの3種がいる池に放したところ、コイは極度に怯えて池の隅に固まってしまう食べられ易くなったそうです。個体差があるようでコイを食べないカワウもいましたが、ヤマメとコイを好むタイプに分かれ、アユを捕食するカワウは少なかったそうです(図1)。次に、アユとウグイの2種を一緒に池に入れたところ、ウグイの方がアユよりも多く食べられることが分かりました。これらの魚の遊泳能力(突進速度)を比べると、アユ>ヤマメ>ウグイ>コイとなるそうです。以上の結果からカワウは逃げ足の遅い魚から順に食べているのではないかと推測されました。ただし、カワウを5羽同時に入れたときは、魚が異なる遊泳行動を示したため、コイが食べられ難くなったそうです。

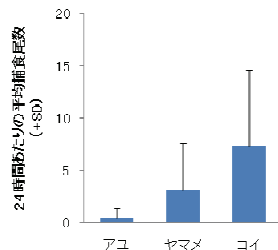


図1. カワウ1羽を3種の魚がいる池に放した場合の魚種別捕食数。

これらの実験から、田中さんたちは、カワウは採餌効率を優先し、その場所で最も捕まえ易い魚を捕食していると考えました。

胃内容物と魚類相から

琵琶湖博物館の亀田佳代子さんと愛知県水産試験場は共同で、野外でのカワウの魚種の選択性を調査しました。愛知県豊川水系の黄柳(つげ)川で、2008年と2009年に、アユの放流前、1回目の放流後、2回目の放流後の計3回、カワウを捕獲し胃内容物を調べるとともに、その場所での生息魚類調査をおこないました。なお、この川ではアユの天然遡上がないため、アユの放流前にはカワウはアユを食べません。2008年はアユの放流によって1回目、2回目と回を重ねるごとに順調に環境中のアユの割合が増加しましたが、2009年は、増水のためどちらの放流後にもアユの生息数は少なく、オイカワやカワムツが優占していました。

亀田さんたちはカワウがどのような魚を食べる傾向にあるのかを分析するために、餌重要度指数(IRI)とManlyの餌選択係数という二つの指数を用いました。餌重要度指数は、カワウにとって主要な餌となる魚種を求めるもので、胃内容物中の魚種ごとの個体数、重量、出現率を用いて計算されます。また餌選択係数は、利用可能な餌の割合に対する利用度の比を示すもので、胃内容中および環境中の魚種組成の比較から求められます。

餌重要度指数は、2008年のアユの放流前にはウグイやヨシノボリの指数が高かったのですが、アユの放流後はアユの指数が高くなり、特に2回目の放流後は極めて高い値を示したそうです。2009年は放流前や1回目放流後にカワムツの餌重要度指数が高くなっていました。餌選択係数を用いた解析では、環境中の魚種組成に比べて胃内容

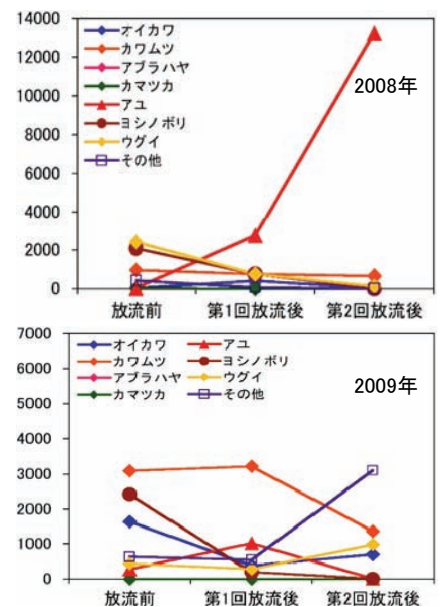


図2. 黄柳川における餌重要度指数(IRI)。

に占めるアユの割合が高いカワウが、2008年の1回目放流から2回目放流までの期間では60% (n=10)、2回目放流後は66.7% (n=12)でした。2009年には環境中に比べて胃内容に占めるカワムツの割合が高い個体が多く、1回目放流後で63.6% (n=11)、2回目放流後は62.5% (n=8)だったそうです。亀田さんたちは、これらの結果から、カワウは環境中の優占種を好んで捕食していることを示しました。

カワウの食性からみえてきた魚の保全

異なる手法で調査されたこの二つの研究は共通の結果に行きついたように見えます。個体によって好む魚種はあるようですが、カワウという種は餌としての魚種に対するこだわりは特にないと考えられます。つまり、カワウは環境中の優占種や捕まえ易い魚種を多く食べているようです。川にアユが多い所では、アユが多く食べられることとなります。しかし、水中の魚が多様だと、特定の魚種に対する採食機会が減少し、人にとって有用な魚種も守られることとなります。

ここで紹介した2つの研究は、平成19年度から3年間おこなわれた農林水産技術会議の研究プロジェクト「カワウによる漁業被害防除技術の開発」によるものです。

参考文献

水産総合研究センター. 2010. カワウによる漁業被害防除技術の開発 -平成19年度-21年度 研究総括報告書-. 108pp.

クロツグミ 英: Grey Thrush 学: *Turdus cardis*

1. 分類と形態

分類: スズメ目 ツグミ科

全長: 210-225mm
 翼長: ♂ 111.3±2.9mm (N=60) ♀ 108.9±3.1mm (N=47)
 尾長: ♂ 75.7±2.8mm (N=60) ♀ 72.4±2.4mm (N=48)
 露出嘴峰長: ♂ 20.7±1.0mm (N=62) ♀ 20.3±3.1mm (N=50)
 ふ蹠長: ♂ 30.6±0.9mm (N=62) ♀ 29.9±1.2mm (N=51)
 体重: 50-65g (11月上旬に83.0gのメスの記録もある)

※ 全長はClement (2000), それ以外は石川県金沢市での標識調査時の記録(平均±標準偏差)による。

羽色:

オスは上面と顔から胸にかけて黒。背面は灰色味を呈し、頭部の黒との差が明瞭に見えることもあるが、暗い林内ではわかりにくい。腹部は白く、黒の三角斑が散在。目の周囲と嘴は黄色。メスは上面から顔にかけて黄土色で、のどから腹部にかけては白く、黒褐色と橙色の斑紋がある。若いオスにはメスに似た色彩の個体もある。ごくまれに上面が一様に暗灰色のメスがあり、若いオスに酷似する。



写真1. 成鳥のクロツグミのオス(上)とメス(中)。上面が暗灰色のメス(下)は、同一個体で色彩に経年変化がみられず、腹部には抱卵斑が出ていた。

鳴き声:

低い「キョッ」という地鳴きのほか、飛翔時などに「ジー」という声を発する。巣に敵が近づいたときに、「ツー」または「ヒー」と聞こえる高く細い声を断続的に出す。

さえずりは、1回のフルソング(完全なさえずり)が2~4秒ほどで、前半の「ホイッスル部」および後半の「トリル部」と呼ばれる2つの部分からなる。トリル部はしばしば省略される。ホイッスルは1個体が約20種類の句をもつ。1つのホイッスル部が「キッコケキッ」など1つの句からなる場合と、「キョコ、キョコ、キョコ」など同じ句の2~4回のくり返しからなる場合とがある。1つのホイッスル部の中で2種類以上の句を用いることもある(石塚 2006)。トリルは「ツリリン」「ツピーーツピー」「ジジーツ」など、つぶやくような音声で(クロウタドリでは「ツイッター部」と呼ばれる: Dabelsteen 1984)、1個体が約70種類の句をもつ。他個体(オスでもメスでも)と接近したときに連続して数分間トリルを続けることがあり、トリルはなわばり防衛にもつがい形成にも重要な役割をもつと考えられる(石塚 2006, Ishizuka 2008)。なお、カラアカハラのさえずり、地鳴きとも本種に酷似するので、春期の日本海側では識別に注意を要する(石塚・手井 2004)。

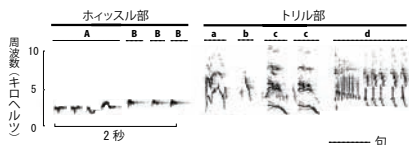


図1. 典型的なフルソングのソナグラム。アルファベットの同じ記号は同じ種類の句を表す。

2. 分布と生息環境

分布:

繁殖は九州から北海道にかけて。北陸以北では平地林でも繁殖する地域があるが、一般には標高

300~1500mの山林。国外では中国の内陸部に繁殖地があるとされる。越冬地は主に中国南部からインドシナ半島北部。



写真2. 蔓植物の多い営巣環境。

生息環境:

広葉樹林でも針葉樹の植林地でも繁殖し、疎林的な環境にもいる。ただし、同じように見える林でも、高密度にいるところと、まったくいないところがある。

3. 生活史

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
越冬期			繁殖期			渡り					

繁殖システム:

本州中部では4月10日前後に初認されることが多いが、多くは4月下旬に繁殖地に帰還する。独身オスは疎林や林縁などで終日さえずり。つがい形成直後にはあまりさえずりなくなり、メスをガードする。ほとんどが一夫一妻だが、少数例、一夫二妻が観察されている(Ishizuka 2009b)。

巣:

メスは低木層がよく茂った林内に、4月下旬から造巣を開始する。オスのさえずり域はそれに伴って林縁から森林内に移動する。アケビ、スイカズラ、ノイバラなど、蔓性・半蔓性の植物に覆われた枯れ枝のつけ根などに好んで営巣し、地上からの高さは平均1.7mだが、地上5~10mの針葉樹の樹冠内に営巣することもある。巣は枯れ草の茎や根で椀型に作られ、土が混ぜられる。外側には藓類が貼られることが多いが、ないものもある。外径は約140mm、深さは約50mm。



写真3. 人工物上の巣。

卵, 抱卵・育雛期間, 巣立ち率:

一腹卵数はほとんどの場合が4卵。卵は淡青色で赤褐色の斑紋が散在。抱卵はメスだけが行い、約13日で孵化する。抱雛もメスだけが行う。ヒナへの給餌回数60%以上はオスの負担で、1回あたりの量(ミズの数)もメスより多い傾向にある。ヒナは約12日で巣立つ。メスはヒナの巣立ちから2~7日後には次の造巣を始め、1繁殖期間に3回の巣立ちを成功させるつがいもある(宮沢 1971)。8月まで普通に繁殖する。多くは10月に日本列島を南下し、11月上旬頃が終認だが、冬期に観察されることもある。

4. 食性

主に地上で昆虫やムカデ、ミズなどを食べる。木の頂で飛翔性の昆虫を捕食することもある。キツタ、ヒョウタンボク、サクラ類などの実も食べる。ヒナにはミズを多く運ぶ。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● さえずりのレパートリーと獲得メス数

ホイッスルやトリルの所有種類数は年齢と関係せず、ホイッスルとトリルの所有数に相関はみられない。一夫二妻

になったオスが一夫一妻のオスよりも多種のホイッスルをもつという傾向はなかったが、一夫二妻のオスは多種のトリルをもつ傾向があった(Ishizuka 2009a).

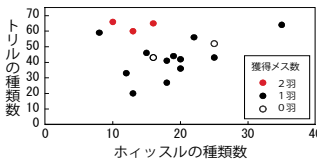


図2. オス17個体のホイッスルとトリルの種類数と獲得メス数の関係。トリルの種類数は、各個体110のフルソングをサンプルとしたときに抽出された数。

● 独身オスと既婚オスのさえずり方の違い

独身オスは木の頂で、大声で、短いインターバルでさえずる。トリルをよくつけ(さえずり回数の60~100%がフルソング)、次々とソングタイプを変える傾向にある。既婚オスはメスや巣の近く(普通30m以内)でさえずるため、樹冠内で、比較的小さな声でさえずることが多い。ソングとソングのインターバルは長い。トリルを省略することが多く(フルソングはさえずり回数の0~50%程度)、しばしば同じソングタイプを続けて用いる。配偶の有無によるさえずり方の違いは、野外実験によっても再現できる。たとえば、つがい形成後に一時的にメスを隔離すると、フルソングでさえずる回数が有意に多くなる(Ishizuka 2008)。ただし、既婚オスも夜明け前(日の出時刻の前の約30分間)には一斉に独身オス的なさえずりを行う。また、日中でも比較的巣から離れた場所で、独身オスに似たさえずり方をする個体もいる。複なわばり的に、不連続な2か所のエリアを行き来してさえずるオスもいるが、双方のエリアで配偶の有無が異なると、それぞれでさえずり方を変える(Ishizuka 2009b)。

● 夜明け前の遠出

オスは夜明け前に巣から300m~1km離れた地点でさえずることがある。遠出をするエリアは他の個体と重複するが、至近距離でさえずり合うことはない。また、そのさえずりの最中に、鳴かない他のオスが1~2mまで接近することがあるが、遠出してさえずっているオスは接近個体を追い払わないことが多い。さらに、そこで録音再生実験を行っても、ほとんど反応(なわばり防衛行動)しない。このことから、遠出のさえずりはなわばり防衛ではなく、もっぱら第二メスを誘引するための行動と考えられる。本種ではメス同士がきわめて排他的なので、オスが一夫多妻を確立するには遠出戦略が有利と考えられる(Ishizuka in press)。

● 小声のさえずり

オスはヒナへの給餌の前後に、非常に小さなホイッスルで1~2回さえずる。メスが巣にいるときほど訪巣直前に高頻度でさえずるオスがあり、メスはそれを聞くだけで離巢することが多い。一方、離巢直後のさえずりは、メスが巣にいないときほど発せられる傾向にある。ヒナの巣立ち時にこのさえずりが頻繁だったという観察例もある(Ishizuka 2009c)。

● 繁殖個体群の消滅例

石川県金沢市海岸部の繁殖地は、主にクロマツとハリエ

ンジュからなる防砂・防風林であり、緑地公園でもあった。本種の営巣は、倒れかけた枯木が他の木と交わるような場所に多くみられ、そうしたところは多くの蔓植物で覆われていた。公園管理の一環として、低木層や林床・蔓植物が刈られ、枯木が取り除かれると、営巣環境が乏しくなるうえ、巣がカラスなどの天敵に発見されやすくなると考えられる。

2000年前後に、林を縦貫する自動車専用道路が開通し、本種の高密度地域がマレットゴルフ場となり、林床の刈り払いも進んだ。砂丘のオアシスを作っていた水脈も整備され、環境が単一になった。バン、アカモズ、オオヨシキリなどは繁殖しなくなった。1990年代に30つがい以上みられたクロツグミも、繁殖つがい数の半減が続き、2007年以降は0になったものとみられる。

一方、本種のなわばりコロニーは能登半島の基部から金沢市にかけての海岸線に、断続的にあったと思われるが、1990年前後から、北東から南西に向かって消失し始めていた可能性もある。中には人為的な環境変化のほとんどなかったところもあり、個体群消滅の原因は究明できていない。1990年代に、同様の環境におけるアカモズやクロツグミの減少は、新潟市でも起こっていたようである。

6. 引用・参考文献

- Clement, P. 2000. Thrushes. Princeton University Press. Princeton, New Jersey.
- Dabelsteen, T. 1984. An analysis of the full song of the Blackbird *Turdus merula* with respect to message coding and adaptations for acoustic communication. *Ornis Scand.* 15: 227-239.
- 石塚 徹・手井修三. 2004. カラアカハラの初期繁殖行動. *Strix* 22: 201-206.
- 石塚 徹. 2006. クロツグミ *Turdus cardis* のさえずりの構造とレパートリーおよびさえずりによる個体識別の有効性. *山階鳥学誌* 37: 113-136.
- Ishizuka, T. 2008. Changes in song structure and singing pattern of the Grey Thrush *Turdus cardis* as responses to song playback and mate removal experiments. *Ornithol. Sci.* 7: 157-161.
- Ishizuka, T. 2009a. Repertoire sizes of the whistle and trill parts of the song of the Grey Thrush *Turdus cardis* in relation to the mating success of the males. *J. Yamashina Inst. Ornithol.* 40: 83-89.
- Ishizuka, T. 2009b. Singing behavior in polygynous Grey Thrush *Turdus cardis* males. *Ornithol. Sci.* 8: 87-90.
- Ishizuka, T. 2009c. Whisper song in the Grey Thrush *Turdus cardis* immediately before and after feeding their young. *J. Yamashina Inst. Ornithol.* 41: 34-41.
- Ishizuka, T. In press. Dawn trips made by the male Grey Thrush *Turdus cardis* to search for a second mate. *Ornithol. Sci.* 9.
- 宮沢和人. 1971. クロツグミの生活史: 繁殖期の生活. *山階鳥研報.* 6: 300-315.

執筆者

石塚 徹 NPO法人 生物多様性研究所 あーす わーむ

近年は居住地の長野県軽井沢で、増えるガビチョウを気にしつつ、オオジシギやコムクドリの生息地保全を呼びかけています。昆虫や魚類、両生類などの「せばめられた生息地」も見て回っています。著書に「鳥のおもしろ私生活」、「森の『いろいろ事情がありまして』」などがあります。



イベント情報

シギ・チドリ類調査交流会を開催します！

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査では、毎年、各地でシギ・チドリ類調査員の交流会を開催しており、今年も北海道根室市で開催いたします。

今回の交流会では、北海道のシギ・チドリ類や湿地に関する話題を中心に発表をしていただきます。また意見交換などを通して調査員のネットワークを広げることも目的としています。湿地やそこに生息する水鳥に興味を持っていただける場となれば幸いです。

また、翌7日には、エクスカージョンを春国岱・野付半島などで行う予定です。調査員以外の方でも自由に参加していただけます。皆様、ぜひご参加ください。

【守屋年史 moriya@bird-research.jp】

● 参加申し込み

交流会の事前申し込みは不要ですが、懇親会・エクスカージョンは人数把握のため守屋宛てに事前のご連絡をお願いしています。詳しくは以下のサイトをご覧ください。

■シギ・チドリ類調査交流会in北海道の案内ページ
http://www.bird-research.jp/1_event/shigichi2010_11.html

● シギ・チドリ類調査交流会in北海道

【開催日】2010年11月6日(土)13:00~17:00 (12:30開場)

【会場】根室市春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンター2階
(〒086-0074 北海道根室市東梅103番地)

【参加費】無料(懇親会は別途)

【内容】

- 1.モニタリングサイト1000調査について
2. 北海道のシギ・チドリ類

2-1・基調講演 風蓮湖のシギ・チドリ	松尾 武芳
2-2・コムケのシギ	大館 和広
2-3・野付・尾岱沼エリアのシギチドリの概要	藤井 薫
2-4・鶴川河口とシギ・チドリ	門村 徳男
3. 国際連携・沿岸域の保全

3-1・シギ・チドリ類ネットワークについて(仮題)	前川 聡
3-2・シギ・チドリ類を通してみた水辺の保全	守屋 年史
4. 湿地の保全にかんする意見交換

【エクスカージョン】 **事前申し込みが必要です！**

翌日11月7日8:30~Aコース12:00, Bコース15:00)

春国岱や野付半島などの調査地を見学します。午前中まで空港に向かうAコースと野付半島まで巡るBコースがあります。

図書紹介

月刊たぐさんのふしぎ ゆかいな聞き耳ずきん クロツグミの鳴き声の謎をとく

石塚徹 著 岩本久則 絵／福音館書店 定価700円(税込)

今月号の生態図鑑をご執筆いただいた石塚さんから今年出版された著書をご寄贈いただきました。「たぐさんのふしぎ」は小学校中高学年を対象とした、自然科学や生活、歴史などさまざまなテーマを、常識やぶりの新鮮な切り口で捉え、じっくり掘り下げて紹介する月刊誌です。スタッフの加藤はいくつかバックナンバーを持っているのですが、いずれも内容の充実した良書だと言っています。石塚さんのクロツグミの研究を取り上げた本書も、すばらしい内容です。ユーモアにあふれた挿絵に、惹きこまれるようにページをめくっていくと、金沢の海辺の森にいざなわれます。鳥の声を聞き分けることができる魔法のアイテム「聞き耳ずきん」を手に入れた主人公が、クロツグミの声と繁殖の謎を解いていく冒険の世界。すごいな、と思ったのは、読み終えてみた時に、研究の方法とそこから得られた成果がとても良く

頭に入ってきていたことです。大人でも満足できる内容を子供向けの優しい言葉遣いと短い文章の中に盛り込むのは簡単なことではありません。鳥を研究するのって、面白い！と読んだ子どもたちはきっとそう感じると思います。鳥の調査研究の面白さを伝えて行く、バードリサーチが目標としているところとも重なります。子供さんだけでなく大人の皆さんにも薦めたい一冊です。【高木憲太郎】



バードリサーチニュース 2010年10月号 Vol.7 No.10

2010年10月19日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎

表紙の写真: サシバ